

自選歌

著者	菅，半作
雑誌名	龍南
巻	2 0 2
ページ	7 1 - 7 1
発行年	1927-07-01
URL	http://hdl.handle.net/2298/8957

自選歌

菅

半

作

水の面にかがやふ日ざしひるならし田螺掘りつゝひもじさおほゆ
ひる近き日ざしとなりぬ障子あかりどに軒の氷柱の影うつりけり

苗代の水澄みとほるあしたなり泳ぐ鮒子の背の黒々し

雨はれて若葉すがしき裏山に今朝ほがらなりかつころの聲

朝早く店の硝子戸拭き終へて心すがしく本讀みにけり

看護みどりりつゝ心疲れぬ障子あかりどにたまたまうつる小雀の影

ひそやかに歌おもひ居れば鶏の遠啼くきこゆ夜は深からむ

朝な朝な障子に早く日のさして目覺めしたしき頃となりけり

青々と今年も竹の生ひにける孟宗山を今日賣らむとす

障子あかりどの日ざしやうやくひるならしトタン廂に霜とくる音